マタイの福音書　第６章　30 節

「きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほど装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。信仰の薄い人たち。」

　前回聞いたみことばを新たなこころの耳で再び聞き入って見たい。お語りになる主イエスが、きょうあっても、と野の草を取り上げます。きょうあっても、の響きには草の儚さを思わせます。その儚さを明らかにし、野の草の物語をお語りになります。

　儚さの現実を現すみことばが具体的に語られます。「あすは炉に投げ込まれる」と語り、野の草がだれかの手で刈り取られ炉に投げ込まれます。不要なものとして焼却されます。草の儚さを認め、その行く末まで眼差しを注がれます。それにもかかわらず、神は野の草にふさわしい装いをしてくださると語ります。人の目からすれば儚い存在ですが、神はこころを留めてくださるのです。

　そして、あなたがたです。野の草に注いだ眼差しが、あなたがたと呼んでくださり、あなたがたにどれほどよくしてくださるのかを語ってくださいます。私たちにも、「きょうあっても、」のみことばが当てはまります。しかし、まして、よくしてくださる神がおられます。